

フランスツアーにご一緒させて頂いた皆様とお別れした後の思い出を抜粋します。

テロの恐怖

パリからカレーに向かう列車の隣客(アフリカ系かと思われるビジネスマン)が手荷物を置いたまま離席後、しばらく帰ってきません。手荷物の中身はと疑心が頭をもたげます。イギリスに一步も上陸せずして・・・というようなことがあってはなりません。しばらく席を離れ連結器の辺りで様子を見ました。数分後隣客が帰ってきたので私も戻りました。チャージャーを持っていないかと英語で尋ねられたので、スマホ用の充電プラグを貸しました。離席したのはこれを車掌のところにでも頼みに行ったのだろうか、一安心したことです。

私は難民？

カレーの港の出国審査は厳しいものでした。空港でもこういう経験はありません。イギリスに知人はいるのか、知人もいないのに2週間近くも一人旅か、いくらお金を持っているのか、その出どころはどこか、日本に家はあるのか、家族はいるのか・・・およそこのようなことを5分近くも訊かれました。

入国直後のカンタベリー二泊とその後のロンドン四泊については、宿を予約済でした。また、ポーツマスからフランスのサン・マロへのフェリーも予約済でしたので、その切符を見せました。それらが少しは効いたのか、後に20～30人の乗客が待っていたこともあったのか、やっと不承不承判を押してくれました。帰国後、知人二人から同じことを言われました、それは難民と間違われたのだらうと。バックパックは新調したものでしたが、初老の日本人のスーツケースも持たない船旅は目立つものがあったのでしょう。

奇妙な親切

ドーバーからカンタベリーに行こうとして乗った列車の車両の相客は二十歳くらいの男性が一人のみでした。少し会話を交わして、列車を間違えていることに気が付きました。これは大変だと青年は次の無人駅に一緒に下車し、鉄道会社に電話をしてくれました。イギリスでは誤って列車を乗り越した場合も高額の追加料金を支払う必要があると聞いていたので、この親切に対し手持ちのポンド紙幣でお礼の気持ちを示しました。ただし、最初から青年の慌てた感じや全体の雰囲気には違和感を覚えていました。青年は Work Experience と書かれた胸章を付けていました。おそらくどこかの養護施設の入所者がカリキュラムの一環として一人での社会経験をしていたのだと思います。後から落ち着いて考えれば、私のミスは乗り越しではなく、乗り間違えだったのですから、そこまで慌てる必要もなかったわけです。

Ze r o

大聖堂で有名なカンタベリーは川の流れも美しく、しばらく滞在してもよいと思いました。宿の若主人は、子供を環境のよいところで教育するため、ロンドンから引っ越ししてきたそうです。

日本を立って10日ほど経っていたので散髪屋に入りました。丸刈りにしてほしかったので、スキンヘッド以外で一番短くと注文しようとしたのですが、私の拙い英語がイタリア人の若主人にはなかなか通じません。そのうち理容師の中年女性が、「O

h, Zero, Zero!」とやっとわかってくれました。帰国して、イタリア語では丸坊主にすることを tagliare i capelli a zero ということを知りました。日本では中学生などが坊主頭にするのを五分刈りとか一分刈りというので、剃髪ではないのをゼロと言われるのは少し違和感を感じますが、日本語の丸坊主にも剃髪と短く刈ることの両義があるので、おそらくイタリア語でも同様な発想なのでしょう。

私は修道士？

マーゲイトはご存じない方も多いかと思いますが、ドーバーから北へ 30 キロメートルくらいの港町で、船や海の絵を多く描いたターナーも滞在したことのある街です。船員がよく利用するのでしょうか、タトゥー屋が目立ちました。私も原野先生に伺うまで知らなかったところですが、ここで有名なシェル・グロット(貝殻洞窟)を訪ねました。海から 2 キロくらい緩やかな坂を上った住宅街の一角にある屋敷の地下に 4 6 0 万個もの貝殻(紫貽貝、ザル貝、エゾバイ、帆立、牡蠣など)で飾られた洞窟です。発見されたのは 1835 年です。何時誰が何のために作ったのかはいまだにわかっていない不思議な空間です。よい観光地になっています。

マーゲイトにはシェル・グロットを主目的として一泊しましたが忘れられない一幕がありました。前泊地のカンタベリーで予約したマーゲイトのホテルがなかなか見つからないのです。探しあぐね、とある古本屋に行くと主人と話をしていた男性がすぐ近くだからと案内してくれました。ホテルの前を二回くらい通っていたのですが間口が 4～5 間しかなく表札も小さなものだったのです。番地までわかっていたのですが、ホテルというからにはという先入見を持っていたため見落とししたのです。帰国後調べたところでは、棟続きのイギリス式長屋(テラスハウス: Terraced House—長屋と言っても落語に出てくるようなものではなく、長さが 100m 以上もあるような、いわば高級長屋です)の現代版(タウンハウス: Town House)と思われます。

その親切な男性が、「また店に来なさいや、私はいつもいるから」といつてくれました。そこで翌日再訪したところ、あなたはモンク(修道士)かと店主に尋ねられました。キリスト教関係の本が多く、また前々日カンタベリーで散髪したところだったのでそう言われたのでしょう。少しおしゃべりを交わした後、お礼にと思いミニ本を二冊(クロムウェルなどの有名人物の神への祈りの言葉を集めたものとミルトンなどが四季を題材とした詩のアンソロジー)求めたところ店主から「それはあげるよ」と進呈頂いたのです。この本が一人旅の最大の記念となりました。

一日信徒

ロンドンには 4 泊しました。ロンドン塔やナショナルギャラリーはゆっくり見ましたが、大英博物館は一時間半かけてエジプトのフロアだけを見ました。見学候補の一つだった戦争博物館は見そびれました。一通りロンドンの街を見るには、あとひと月は要りそうです。

一日はグリニッジを訪ねました。そこからのロンドン遠望はとても印象に残るものです。目的としていた王立海軍学校の天井画の見学には予約がいたとのことだったので断念し、近くの教会に行きました。丁度日曜日の礼拝が始まるころだったので、式次第と祈りの冊子を借りて信者とともに 80 分をそこで過ごしました。教会を後にする際、よく最後まで参列したと言わんばかりに係の方が喜びを表してくれました。

ロンドン雑感

この他のロンドンの印象をいくつか記します。

○土地が広く建物、道路、広場のスケールが大きい。

(参考) 森林率と最高峰

	英	仏	独	米	中	日
森林率 (%)	13.0	31.0	32.7	33.9	22.2	68.5
最高峰 (m)	1,344	4,810	2,962	6,194	8,848	3,776

森林率：ある地域における森林面積の割合(2015年の値。出典：世界銀行)

- 大道芸が盛ん。遅くとも夜九時には宿に帰っていたので、危険な思いをすることはありませんでした。唯一悪意を感じたのはピカデリー広場でサッカーボールを操る老大道芸人からボールを奪って投げようとした若者です。彼の表情からは冗談や悪ふざけというものは感じられませんでした。
- 地下鉄で実感しましたが、シニアには親切です。レディ・ファーストとともに騎士道精神と関係があるのでしょうか。
- ウェストミンスター橋を歩いている際に花売り女が私を狙い撃ち。日本人はよい商売になると学習しているのでしょうか。あるいは、私を個人的に組みし易しと喝破したのでしょうか。
- 接客対応
4連泊したホテルは全般に感じのよいホテルでしたが、共用のバスルームのハンドソープが空だったので、チェックオフの際、従業員の少女に告げたところ、ケロツとして「お部屋に固形石鹸があったでしょう」。日本なら、まずは「すみません」というところですね。咎めるのではなく世話になったお礼代わりに言ったので、この答えは印象に残りました。
- イングリッシュ・ブレックファスト
とにかく質量ともに圧倒されました。二日目から豆と炒り卵など、料理は二つだけにしてもらいました。一回はベネディクションというメニューものを頼んでみましたが、少な目で私にはこれで十分でした。あとでベネディクト会の戒律の一つが清貧であることを知りました。

オックスフォード

ハリー・ポッターの映画にも登場したボドリアン図書館は今も学生が利用しています。過去多くの碩学も学んだ図書館の中では、身が引き締まることは間違いありません。

この図書館の近くので中世以来の古さを誇るといわれるパブに一時間くらい滞在しました。入口の扉の陰に3つほど高椅子があり、そこで立ち席の客を観察しました。ポルトガルで民宿をしているという夫婦と少し話しましたが、一人でパブに入るのはやはり落ち着けないところがあります。

オックスフォードの宿は素泊まりです。夕食にと女主人から聞いたフィッシュ・アンド・チップスを売る店に行きました。小さいのでよいと言ったのですが、揚げてくれたのは3人前くらいでした。宿でそれを前にして、何だか餌をもらったような気持ちになりましたが、ともあれ私にとってはイギリスの代表的なスナックの貴重な初体験でした。

温泉

温泉仲間にきちんと報告するため、バースには格別の関心をもって訪れました。古代ローマ風呂の源泉からは今でも35～38度の湯が沸き出しています。プールのような風呂には入れませんが、古代の風呂跡をいろいろ見学しました。すぐ近くの温泉には実際に入りました。日本のスーパー銭湯のようなものです。水着での混浴で、サウナ

は60～70度、浴槽は38度ほどです。入浴心得の一つに、サウナの中で親密になり過ぎないようにとあるのが印象に残りましたが、温泉は日本が質量ともに圧倒していると改めて感じました。ハンガリーなどまだまだヨーロッパにはよい温泉地があるので今後の楽しみとします。

一日バスツアー

バスからの一日バスツアーでストーン・ヘンジ、エーヴベリーの巨石群とコッツウォルズの一角を見学しました。ストーン・ヘンジは遠くからしか見ることができません。多くの観光客が近くまで行って土地がえぐれるのを防いでいるのでしょう。祭壇として使うために作られたとするのが一般的だそうです、誰がこれだけのものを作らせたかなど、謎はいろいろです。

少し離れたところは羊の牧場でした。フランスでもそうでしたが、イギリスでも列車の窓からたくさんの牛・羊・馬を見ました。フランス南西部の旅では、近くに牧場が多いせいでしょう、どこのレストランでも蠅が同席してくれましたが、何かと緊張することの多い一人旅にあって牧場風景はほっとするひと時でした。

二か所ほど訪れたコッツウォルズは予備知識の通り、かわいらしい佇まいです。近くの小川に釣に行く子供も見かけました。ある村の通りに面した小屋は飲んだくれを一晚閉じ込めるためのものだったそうです。いわばお仕置き部屋、今風にいえば豚箱ですね。さぞ効き目があったことでしょう。

進退窮まる

バスに二泊したホテルはかなり古いものでした。スマホに充電するためアダプターをコンセントに差し込もうとしましたが、どうしてもうまくいきません。無理に押し込むと折れそうです。受付のお兄さんは、コンセントは三つあるので全部試すようにと言います。一つ部屋のコンセントは同じ仕様のはずなのだと思いますが、テレビのコードを抜いて3つ目のコンセントを試しましたが、案の定入りません。ここで驚いたのは、抜いたテレビのプラグと私のアダプターのそれは全く同じ形、大きさであったのです。これなら入らないはずはないと再度試みますが、どうしても入りません。仕方がないのでテレビのプラグをもとに戻そうとしたのですが、これがどうしても入らないのです。無理をして壊してはいけませんので、受付のお兄さんに話してそのままにしておきましたが、結局このホテルでは二日間、充電ができませんでした。これが後々尾を引くことになります。

ポーツマス

イギリス最後の訪問地はポーツマスです。ここからフランスのサン・マロにわたり、モン・サン・ミシェルを見に行こうとこの街を選び、一晩かけて航行するフェリーのチケットは予約済みでした。

昼前にポーツマス港について、まずバックパックを預ける場所を観光案内所で尋ねました。通りをの向こうのオアシスというカフェで預かってくれると聞きました。通りの向こう側は100メートルくらいでしょうか、商店が並んでいます。それらしき店の前に立つおじさんに尋ねましたが、この辺にやそんな店はないねとのことでしたので、そのままブロックのはずれ辺りまで進みました。おかしいなと思いつつ、中華料理店に入り腹ごしらえをしました。店員からブロックの端っこの方の店だと教えてもらい、またもとに戻っていくとオアシスと書いた立て看板がありました。そこは私が最初に尋ねたその場所だったのです。立て看板の裏側は何も書かれておらず、そのまま振り返ることもなく、通り過ぎていたわけです。あのおっさんは一体どういう気

であんな答えをしたのかと思いますが、一人ゆえの観察能力の限界をひしひしと感じました。

オアシスにバックパックを預け合わせてスマホの充電を頼みました。預かり賃は3ポンドでしたので充電分も含め5ポンドを渡しました。

最大の悔い

ポーツマスで博物館を見学した後、20時半発のフェリーに乗りました。ブリタニー・フェリーという24500トンの大きな船です。ピアノの生演奏のあるレストランでイギリス入国後一番豪華な夕食を愉しんだまではよかったのですが、フリーWi-Fiの場所でもインターネットにつなげることができず、結局、ここでもフランスの宿の予約ができませんでした。

翌日、5時頃目を覚まし、再度インターネットへの接続を試みましたが失敗でした。入港までしばらくあると再びリクライニングシートに横になったのが間違いのもとで、係員に起こされたときは下船の案内を放送中でした。失敗の原因はフランスは夏時間であったことです。ポーツマスを出る際に一時間時間を進めておくべきだったのです。

サン・マロは美しい街でした。おそらく今後、沖からこの街を望むことはないでしょう。フェリーで寝過ごしたのが悔やまれます。街を少し散策しながら、直行便のバスもなく、鉄道を使っても結構時間がかかるモン・サン・ミシェルは断念し、まずパリに向かい当日の宿を探すことに決めました。イギリスでフランスの宿を予約していなかった付けが回ってきたわけです。後から思えば、サンマロに一泊してパリの宿も予約し、それからモン・サン・ミシェルに向かえばよかったのですが。

あわや野宿

パリまでは意外に時間がかかり、モンパルナス駅に到着したのは5時近くでした。パリの観光案内所はか所しかなく、しかもすでに営業時間外であったうえ、ここでもネット接続がうまくいきません。親切に教えてくれる人も自分の列車に乗る時間だからと途中で帰ります。

あせる気持ちも出てきて、とにかく少しでもシャルル・ド・ゴール空港まで行きやすいところで宿を見つけようと(後から考えればその必要は全くなかったのですが)タクシーで北駅まで行きました。荷物もあったし、地下鉄を利用する心の余裕もなかったようです。

北駅のそばでは、幸い数分くらいの間に大通りに面したホテルを見つけ一泊の宿を乞いました。部屋に入りホッとしたのもつかの間、何やら怪しげな声が隣から聞こえてきたのです。これはとんでもない宿だ、今晚は寝られないのではと心配したのですが、幸い小一時間して収まり、インターネットにスマホをつなげてあと二泊の宿を予約することもできました。翌朝、宿の主人から今日の宿はもっと安くするよとしきりに勧められたのは忘れられません。

出たところ旅行の仕上げ

翌日は少しのんびりしたいと思ったのでしょう。ルクセンブルク庭園からサンジェルマン辺りを散策しました。庭園では皆さんと休憩した茶店のそばも再び通りました。

パリの最後の夜を過ごした日は、ルーブル美術館を訪ねました。やっとのことで入口を見つけましたが、観光客は結構いるのですが、行列もなく入場券売り場がどこかもわかりません。しばらく歩いて看板に定例休館日(火曜日)とありました。

仕方がないので近くのオルセー美術館に行きました。ルーブルあぶれ組がかなりい

たのでしょう。小一時間待って入館しました。有名な絵の前では多くの人が撮影していたので渋滞の一因になっていました。

ここでインターネット接続を試みましたが、うまくいきませんでした。中国人カップルのうちの彼女がスマホを使っていたのでお願いしたところ、つなげることができました。スマホ・リテラシーの向上は必須であると改めて痛感しました。

オルセーのあとモンパルナスのカタコンブを訪ねましたが、目的地付近でいくら探してもそれらしいものが見当たりません。あの高い木の下(私もそこしかないと思っていました)だろうと言われ、やっと改修工事で閉鎖中であることが分かりました。それらしきところが塀で囲ってあったのですからもっと早く気付くべきでした。

ルーブル、カタコンブと出た所勝負の討ち死にが続いたので、夕食は駿直しにと近くのレバノン料理の店に入りました。レバノン料理は初めてでしたが、魚料理(鱈)はまずまずでした。パンはインドのナンを薄くしたような(広島のお好み焼きの皮を厚くしたような)もので、かなり離れてはいますが地続きゆえの交流の影響もあるのかと感じました。

帰国

9月3日にりんくうタウン入りし、27日に予定通り関西空港に帰りました。それから10月いっぱい、長旅の疲れが出たように思います。フランス、イギリスの旅はおおむね天候に恵まれ、暑くもなく寒くもない快適なものでしたが、旅の疲れの最大のものは、スマホがうまく使えないことによる精神的消耗です。収穫は大名旅行と修行の旅の両方を体験できたことです。ツアーと一人旅はそれぞれ長短があり、一概に比較することはもちろんできませんが、おおざっぱに言えば、7対3でツアーに軍配を上げたい気持ちです。とはいえ、一人旅もまあ何とかかなとの感触は得ることができ、色んな経験もできました。

フランスツアーで一緒させて頂き、私の一人旅のよい後押しをして頂くことにもなった皆様に改めてお礼を申し上げます。